

私の教師論

—生徒に学んだ教育理念—
松下邦雄

はじめに

- 1、高校教育を考える (1)
 - ①高校教育の基礎基本、目的意識と問題意識
 - ②教育に関する権利と義務・・・感謝・反省・謙虚
 - ③指導の心得、「認め」「励まし」「見守る」
 - 2、学んだ教師像 (2)
 - ①聖職意識の尊さ
 - ②教師の成長は、生徒に学ぶ姿勢にある
 - ③非凡な教師は、「当たり前教師」
 - ④教師の歎びと生き甲斐は、生徒の成長にある。
 - ⑤若き教師の苦悩・困惑に対して
 - ⑥新任教師が心すること
 - ⑦教師という職業の特殊性
 - 3、校務生徒指導部の責務 (4)
 - ①校務生徒指導部、その使命と目的
 - ②生徒指導の在り方。外面指導（他律的指導）と内面指導（教育相談的指導）。
 - ③教育実践に限界なし
 - ④真の優しさと厳しさ
 - ⑤生徒一人ひとりに秘められた能力を認める
 - ⑥全体に対して厳しく、個人に対して寛大に。
 - 4、問題行動生徒への指導 (6)
 - ①特別指導（学校謹慎と家庭謹慎）
 - ②反社会的問題への指導
 - ③非社会的問題への指導
 - ④社会性を育む指導
 - ⑤問題生徒と問題行動生徒の違い
 - 5、問題行動別指導上の留意点 (8)
 - ①窃盗、万引き、暴行傷害
 - ②対教師暴力
 - ③いじめ
 - ④保護者召喚への対応
 - 6、特別指導（学校謹慎）の具体的指導例 (10)
 - ①教育講和
 - ②「・・・ながら教育」
 - ③自己認識、自己実現を高めるグループ研修（意見交流）
 - 7、教師と生徒の出会いを考える (11)
 - ①生徒との出会い。偶然の出会いと必然の出会い
 - ②「この高校に来て良かった」と述懐する生徒に。
- 終わりに (12)

私の教師論

—生徒に学んだ教育理念—

松下邦雄

はじめに

私学一筋47年の道のり、改めて思い起こすのは現場教育の日々である。仙台大学1期生として卒業後、学校法人安達学園中京商業高等学校（現中京高等学校）に赴任したのは昭和46年であった、以後系列の中京学院大学事務局勤務等7年を除き40年に亘る高校教育であった。その道程の一つは34年に及ぶ校務生徒指導部中心（校長代理2年を含む）の生活、二つ目は通信制課程サポート校の2年、そして三つ目は10年振りに校長として復帰した最後の4年であった。いずれも現場教育に専念した日々であり、立場こそ異なるが根底に流れる教育理念は一貫していたと自負する。それは一人ひとりの生徒に対して最善を尽くすことに尽きる。問題行動を起こした生徒への事後指導、自信喪失から生ずる自暴自棄に陥り引きこもる不登校生徒への支援、全校生徒を守るための学校秩序の確立も結論は一つである。生徒の人格を「認める」ことを基本とし、意欲を高めるために「励まし」、その成長を「見守る」ことである。そして、教師の成長は生徒に学ぶ姿勢にあると信じてきた。多くの生徒から学んだ貴重な教訓をまとめたのがこの拙文である。

1、高校教育を考える

①高校教育の基礎基本、目的意識と問題意識

生徒を取り巻く環境は時代の推移と共に変化しても、高校3年間を過ごす生徒の実態は今も変わらない。実質的に高校教育は社会に巣立つ最終教育機関でもある。従って豊かな人生を確立するためにも、人格形成の基盤を成す高校生活は極めて重要だ。青年期特有の揺れ動く内面に潜む強い自己顕示欲と共に、夢・希望・願望の実現には現実の厳しさと苦しさが伴う。故に、適切な指導と助言、且つ温かく見守る教師の存在は大きい。高校教育の基礎基本は、目的意識と問題意識を確立することである。将来への展望を開く「目的意識」、その目的を達成するためには「問題意識」が不可欠だ。厳しい局面にあっても、常に目的を達成するために「今自分は何をすべきか」と自問自答して努力する姿勢「問題意識」を育むことである。

②教育に関する権利と義務・・・感謝・反省・謙虚

教師の権利は、教師としての義務を果たさなければ認められない。「義務果さずして権利なし」である。教師の権利とは、生徒・保護者、社会生活全般に及ぶ方々に、尊敬の念を抱かせる資質である。教育の専門家としての知性・教養そして指導力は言うに及ばず、優先すべきは人格者として範を示す人材である。教師の権利は、その立場に相応しい義務、即ち「感謝」、「反省」、「謙虚」に満ちた姿勢にある。教師としての立場を厳しく認識して、常に前向きに努力精進すること。生徒・保護者への感謝の念、自己研

修と自己節制を怠らない反省心、そして人間としての慎み深さを忘れない謙虚さである。

③指導の心得、「認め」「励まし」「見守る」

教育の基本としての鉄則である。生徒の人格を「認め」、意欲を高めるために「励まし」、その成長を温かく根気強く「見守る」。この理念に基づいた指導によって、生徒との強い絆が構築される。幼児期から青年期は言うに及ばず、生涯に及ぶ人生において「認められる」欲は意欲につながり、その意欲は「励まし」によってより高まる。そして、その成長過程を温かく根気強く見守る。認め、励まし、見守ることで、教師と生徒の相互理解が確立され、確固たる相互信頼が構築される。

2、学んだ教師像

①聖職意識の尊さ

生徒の人生に深く関わる教師の責務はとてつもなく大きい。特に担任教師は文字通り「ホームルーム」、家族に匹敵する緻密な人間関係が求められる。生徒及び保護者は担当教師を選択指名は出来ない。嘆かわしいことであるが、教師との出会いに運・不運が存在することは避けられない。人間の個性が多様であることは言うまでもなく、教師の個性も又千差万別である。教師として心することは聖職意識である。教育現場は神聖な処であるからして、全ての場面における教育活動に全精力を注がなければならないからである。聖職意識とは、生徒一人ひとりに最善を尽くす教育実践である。極論を唱えるならば、時間を超えた環境の中にいつも生徒が存在することだ。例え生活権にかかる比重が高くとも、目の前の生徒に対する責任を優先させる教師である。崇高な理念を支えに、使命と責任を伴う神聖な職務がそうさせる。青年期特有の心理的不安から問題行動を起こす生徒にも、限りない可能性に満ちた将来がある。生徒にとって教師との出会いがその後の人生に大きく寄与した時に、聖職の名に相応しい教師となり得るのだ。

②教師の成長は、生徒に学ぶ姿勢にある

仮に素晴らしい指導（授業）と自負しても、それは教師自身の自己満足に過ぎないこともある。良き指導とは生徒の評価が伴って初めて価値を成す。価値ある授業かどうかは生徒が判断するからである。生徒の反応が全てだ。高貴な授業内容でも、生徒の心に届かなければ学習効果は認められない。教師の評価は生徒が示した回答、反応に委ねられる。画一指導に偏ることなく、一人ひとりの生徒の個性を尊重した対応指導が必要な所以である。生徒の評価を真摯に受け止める教育経験を重ねることが、教師を成長させる。

③非凡な教師は、「当たり前の教師」

- ・生徒の心を洞察したキメ細かな指導。
- ・公正な判断による毅然とした指導。
- ・教師の責務を果たすべく、徹底した教育実践。

極めて当たり前のことであり、当然の内容である。しかし、教育に関する諸問題の多くはこの当たり前のことが成されていないからである。同様に当たり前のことが出来ないから人間社会の歪みが後を絶たないように、秩序ある学校社会を確立するためには当たり前の指導が徹底されなければならない。即ち、当たり前のことを何の抵抗もなく素直に実践出来る生徒を育成することだ。人間としての基礎基本でもある他人に対する心遣い、思いやり、感謝の心、謙虚な言動である。教師は常に「当たり前のことを何の抵抗もなく、当たり前の教育実践」に努めることだ。そして、生徒一人ひとりの個性・能力・特性を重視した指導実践こそ責務であり、それが「当たり前の教師」の条件である。

④教師の歓びと生き甲斐は、生徒の成長にある。

より良い教育を求めて奮闘しても思うようにならず、苦悩困惑することも多い。しかし多くの生徒の中にあっても、一人ひとりの個性を重んじた指導姿勢が生徒に受け入れられる大きな要因となる。教師の生き甲斐は、健やかな生徒の成長にある。そして高校生活のみならず、生涯に及ぶ人生において歓びを共有することである。即ち、生徒に尽くす歓びを生き甲斐とした教師である。

⑤若き教師の苦悩・困惑に対して

思うに任せぬ教育現場において、経験の浅い教師が苦しい場面に出会うことは少なくない。その際に管理職の立場にある教師の適切な指導助言が救いである。その助言内容の一例である。

- ・教師の苦悩が深ければ深いほど、教師としての資質がある証し。教師の大切な条件は、如何なる生徒に対しても真剣に向き合う姿勢であると励ます。
- ・トラブルが生じても一過性である。生徒にとって教師に対する「甘え」があることも理解させる。
- ・教育者としての信念を貫く姿勢を、心の支えにすることを強調する。

結論は、真剣に相對して懸命に指導する教師の姿勢である。その言動は必ず生徒の心の琴線に触れる。生徒は卒業後、社会の一員として幾多の苦勞・経験を重ねて成長していく。家族に恵まれて最愛の我が子が学校生活に直面した時、暫しお世話になった諸先生に思いを寄せるものである。特に印象に残るのは真剣に對峙してくれた人間味ある教師であり、教え子が立派な社会人となった暁に、思い起こしてくれる教師である。教育成果は、長い年月を要して報われることも多い。従っ

て焦ることなく、挫けず、諦めず、根気強く、誠意をもって指導することである。教師の経験が浅くとも、その熱意こそが教育現場には必要なのだ。

⑥新任教師が心すること

年代の異なる教師集団であるが、例え経験浅いと雖も教師としての立場は同一である。新任教師の立場でも、生徒が期待する教師像を裏切ってはならない。求められることは、経験の不足を補って余りある情熱こそが新任教師の最大の強みである。そして、生徒との年齢差が最も近く、共感を得る条件に恵まれていることを認識することだ。教育愛に裏打ちされた真摯な取り組み、自己研修に努め、謙虚な心で最善を尽くすことである。教育経験は浅くとも生徒との相互理解による相互信頼が確立されれば、立派な教師としての存在感を示すことになる。若さを強みとする所以であり、若さ故に生徒に学ぶ謙虚さが教師としての成長につながる特権でもある。

⑦教師という職業の特殊性

大学の教職課程を経て採用された教員待遇には特殊性が伴う。即ち、準備期間無くして第一線に立つからである。「先生」と呼ばれるその肩書により、赴任直後から紛れもない一人前の教師として現場教育の実践が求められる。一般企業等では事前研修等の適応指導が成され、徐々に適材適所の職場配置となるのが常である。しかし教師は、大学4年時に行われる「教育実習」が唯一の教育現場体験である。従って教育経験は、生徒と共に歩むことから始まる。指導の結果その良否は、全て生徒の回答にある。快い反応には手応えを覚えて意を強くする、逆に心に届かず寧ろ不満の意を認めた時などは、何が不足しているかを知らされる教訓となる。新任教師としての未熟さは誠意ある姿勢で補うことが可能な特殊な職業でもある。直向きな姿を象徴する、若さが強みとなるからだ。

3、校務生徒指導部の責務

①校務生徒指導部、その使命と目的

学校教育の基本は学習指導と人間教育の両輪である。文武両道の如く、知育と徳育である。更に健全な身体も加わり、知育・徳育・体育、三位一体の教育が範とされる。生徒指導部は徳育の領域であり、その目的は社会生活に正しく適応できる人間としての資質を養うことにある。集団生活を営む人間社会への適応力とは、様々な環境に合わせた生活を可能とする能力である。学校生活はミニ集団社会であり、社会適応力を育むことは極めて重要だ。生徒指導部は学校全体の秩序確立を目指すと共に、生徒個人の尊厳を常に重視して教育の実践に努めなければならない。

②生徒指導の在り方。外面指導（他律的指導）と内面指導（教育相談的指導）。

・他律（規範意識・社会秩序の修得）→自律（セルフコントロール）→自立（独立）

他律的指導と共に、自律を促す内面指導は不可欠だ。他律→自律→自立・独立、このプロセスに意義がある。特に問題行動を起こした生徒に対しては先ず他律的指導を優先する。公德心を守るための指導には、信賞必罰の厳しさも伴うからだ。自律を高めるための内面指導は、自己洞察を求めて心の成長を図る。健やかな自律の芽生えが次なる社会的自立・独立へとつながる。他律的指導は成長への基礎を成し、内面指導（教育相談的指導）は自律を育み心の成長を促す力となる。

③教育実践に限界なし

教育実践に限界はない。生徒に指導の限りを尽くしても、終わりはない。あるのは自己満足に過ぎないと思うことだ。底の無い指導領域で懸命に尽力する教師の言動が生徒の心を掴み、信頼感を構築する要因となる。故に、最善を尽くすことが真の教師の姿である。逆に、厳しい局面から逃避することも容易だ。ここに教師の意識、格差が問われるのである。生徒は立場的に受け身である。教師の怠慢は意外にも目立ちにくいのだ。新鮮さに欠け、情熱を失い、漫然とした指導に終始している教師だ。このような教師の共通点は、向上心に欠けた低レベルの現状に自己満足していることだ。自己保身が強く低い価値観に甘んじる教師の存在は、生徒を不幸にする反面教師となる。生徒の生涯に及ぶ教育実践の価値ある成果は、教育愛を貫き限界に挑戦する気概に満ちた教師から生ずる。

④真の優しさと厳しさ

優しさは厳しさ、厳しさは強さ、強さは正しさに裏打ちされる。故に正しい人間は、強く、厳しく、優しい人間性を併せ持つ。教師自身の厳しい姿勢とは、生徒が抱える苦悩への深い洞察力、心情を理解して感情に左右されない冷静な指導に認められる。教師の心根の優しさに裏打ちされた厳しさにより、生徒との信頼関係が構築される。

⑤生徒一人ひとりに秘められた能力を認める

成績に関しては優劣があり、上下の判定が成される。しかし、学習成績は生徒の能力を示す要因であるが全てではない。生徒一人ひとりに秘められた能力は無限である。ところが成績不振の生徒に対して「頭が悪い」と表現する教師もいる。とんでもない蔑称であり、許されない言動である。「成績が悪い」との表現なら現実的だが、能力そのものを否定するような言葉は差別用語である。生徒の生涯において開花する能力を、高校時代に予測することは難しいが、各界で活躍する卒業生の全てが成績優秀者とは限らない。成績に比例するとは限らず、寧ろ逆のケースも多い。秘められた能力を信じ

て夢を託し、真摯に育む姿勢が教師の大切な資質である。生徒一人ひとりの「個性」「徳性」「能力」を重視して、生涯に亘る教育実践に心血を注がなければならない。

⑥全体に対して厳しく、個人に対して寛大に。

賛否両論はあるが、最も重要な対応である。全体とは全校教職員生徒であり、全体を対象とした画一的指導にならざるを得ない。社会生活に不可欠な行動規範、公德心の高揚や規則の遵守は、年間を通した各種行事等を活用して周知徹底を図る。この他律的指導には、戒めを含む厳しい姿勢で臨むことだ。一方、個人に対しては、徹底した内面指導が肝要とされる。問題行動を教訓とする心の成長を求めて、根気強く指導を展開することだ。

4、問題行動生徒への指導

高校は義務教育ではない故、生徒指導に関する諸規定の中に懲戒処分項目がある。問題行動の内容如何によっては、退学処分を課すこともある。この場面では学校全体の立場か、個人の尊厳を優先するかの難しい局面に遭遇する。最終的には最高責任者である学校長の判断に委ねられるが、生徒指導部の立場としては、最大限の許容範囲を認めることだ。全体の秩序が崩壊する懸念を危惧しながらも、生徒の将来を慮って最善の指導に全力を注ぐことである。学校全体の秩序を守る一罰百戒の論理もあるが、一人の生徒の生涯に関わる極めて重大な局面にあつては、在籍を認めつつ指導を展開することが望ましい。学校教育は生徒が主体であるから、生徒個人の尊厳を最も重く受け止めることである。学校全体の秩序を確立することは、全教職員が協力して日常の教育実践に励むことで可能となる。従って安易な判断による懲戒処分は絶対に避けるべきだ。

①特別指導（学校謹慎と家庭謹慎）

比較すれば当然のことながら長短はある。極論すれば家庭謹慎は教師側の都合に傾き、学校謹慎は逆に負担がかかる制度だ。生徒指導上の観点からすれば、学校謹慎が極めて教育的だ。生徒指導部長を中心に、担任教師を始めとする関係教師が温かく指導できる環境にあるからだ。学校全体で育む意義は大きく、保護者・生徒にとっても学校に対する信頼感が生まれる。

②反社会的問題への指導

学校は前述の如く、ミニ社会である。規則の遵守は社会規範を体得することであり、特に厳しい指導が求められる。しかし強制的な押し付けではなく、徹底した内面に問いかけることである。画一的な指導は全体指導に留め、生徒個人に対しては個性を重んじた対応を重視する。生徒の心の琴線に触れる適切な助言、キメ細かな配慮に満ちた指導である。

③非社会的問題への指導

不登校、引きこもり、家庭内暴力等は、追い詰められた苦悩と困惑の渦中に生じることを理解することだ。無理強い是最悪で、只管「待つ」姿勢で対応することである。常に冷静な視点で現状把握に努め、焦らず根気強く、先を読む指導に専念する。生徒一人ひとりにはそれぞれ異なる背景があり、取り巻く環境を取り上げても、生育環境、家庭環境、学習環境等を始めとして多様に富む。従って、その根本原因を究明するために、心情の理解に努める誠意に満ちた対応が肝要だ。生徒との相互理解・相互信頼が芽生えて、語り合うことが可能となれば次は明確な目標の設定である。但しこの設定は、実現可能なレベルから始める。そして、達成と共に徐々にその高さを上げていく。段階毎の達成感が、何よりも意欲を高めることにつながる。心の成長に比例して確実に目標が達成され、その最終目標が目的となる。何よりも生徒の人格を「認め」、意欲を高めるために「励まし」、そして成長を温かく「見守る」指導過程が肝要である。

④社会性を育む指導

社会の組織体制は一般的に縦型である。しかし個人的側面からすれば横型も又不可欠である。正しい社会性は、この縦型と横型のバランスが取れて初めて成立する。縦型を象徴する上下関係の立場には、会社組織における役職、家族間における親子・兄弟関係等の主従関係（上下）がある。この立場を認識することは、社会の秩序が形成される基本である。又、横型も個人の権利（人権）を尊重する上において神聖な領域である。好ましい社会生活は、この縦と横の立場が理解されなければ確立されない。社会全体の権利と義務、同様に個人の権利と義務の尊重が原点となる。

縦型（立場に関係する上下関係・・・指示、命令）

横型（個人の権利・人権・・・要求、主張）

縦型＝横型・・・バランスがとれて、組織力が活かされる理想的な社会
 縦型＞横型・・・一方的な権力体制に傾き、強権指導に陥り易い社会
 縦型＜横型・・・義務果さず権利の主張、組織の統制・秩序が乱れる社会

混迷する社会の一因として、縦型の線が脆弱となり、横型重視の傾向がある。その結果として、過度の権利意識が蔓延り立場に相応しい礼節・規律・秩序が失われている。高校は社会に巣立つ最終教育機関であり、社会は間違いなく縦型社会の体制にある。当然のことながら、社会人としての立場に適応した言動を体得さ

せなければならない。望まれる社会性の獲得とは、要求過多の横型に傾くことなく、本来の縦型をしっかりと認識して行動することである。結論は、権利と義務の鉄則である。一例を挙げるならば「礼節」である。立場に相応しい言葉遣い、挨拶・礼儀は好ましい人間関係構築の基礎基本である。社会適応力を高めるための必須条件でもある。

⑤問題生徒と問題行動生徒の違い

「問題生徒」は一人として存在しない。正確には「問題行動生徒」であり、その行動自体が問題なのだ。問題行動とは社会秩序に反して、他人に迷惑を及ぼすことである。この真相は、意思の弱さから非行に走ったここにある。是非の判断はあっても、問題行動を起こした心の深層を究明することだ。そこに問題解決の糸口がある。「何故このようなことを起こしたのか」、「その原因は何か」。現象面だけではなく、その背景にある複雑な要因を突き止めることだ。内面にしっかり働きかける指導が極めて効果的であり、教師と生徒の信頼関係が図られる条件となる。相互理解から得られる「相互信頼」である。高校生の問題行動は、まだ社会的に許容範囲にある。しかし、成人となれば、厳しい社会的制裁を受ける立場となる。生徒は教育的指導を受ける立場にあり、社会人としての資質を学ぶ猶予期間ともいえる。経験には良い経験もあれば、失敗を伴う好ましくない経験も多い。しかし、経験は全て貴重な教訓になる。例え悪い経験でも成長した暁には、貴重な体験となり人生の宝になる。従って、常に生徒の夢・希望・願望を叶えることが、教師の使命と責任を果たすことになる。

5、問題行動別指導上の留意点

①窃盗、万引き、暴行傷害

仏教用語の「因縁生起」。物事が成就するには「原因」があり、取りまく様々な環境、即ち「縁」によって成り立つ。反社会的問題行動は、他人に迷惑を及ぼす行為である。しかし、事の是非については分りきった上での行動である。大切なことは、そのような行動に走らざるを得なかった直接的な「原因」と、その行為を助長するような間接的な誘因は何かを究明することだ。前述の如く、経験には良悪がある。成功経験は大きな喜びに包まれ成長への大きな弾みとなる、反面失敗経験は、辛く悲しい出来事となる。しかし、将来性に富む高校生にとって全ての経験は、かけがえのない教訓になる。寧ろ失敗経験から体得することは多く、成長への大きな糧となる。適切な指導とは、荒んだ心を和らげ、不満の因子を除去し、将来への展望を可能にすることだ。問題行動への真摯な対応指導は、将来ある生徒の人格発達課題を達成する絶好の機会でもある。

②対教師暴力

学校秩序を守るために、根絶しなければならない極めて重大な問題だ。原因を究明することが最も大切な解決策だ。その直接的原因は殆ど生徒側にあるが、教師側にも非が認められることもあるからだ。

・教師と生徒、立場の相違

教師の使命感と責任感には権力が伴う。生徒は受け身で、学ぶ側としての立場がある。教師が主導する授業は、真面目に学ぶ生徒で円滑に進行する。しかし、全ての生徒が学習意欲に富むとは限らない。寧ろ高校全入時代の中で意欲に欠けている生徒も多い。当然無気力な生徒が、義務的な姿勢で授業に臨むことになる。教師の使命感と無気力な生徒の間に生ずる意識の違いが、対教師暴力の温床となる。生徒の心情を理解することなく、一方的に授業を進めることで教師としての体面を保つ。あるいは問題行動に対して、教師の立場を盾にした居丈高な指導姿勢が生徒の反発を招き、その限界を超えた時に生ずる。教師という立場に誇りを抱くことは尊いが、時として尊大な考えに陥り易いのも教師の性である。教師と生徒のトラブルは、置かれた立場を認識出来ない心の溝が原因である。問題解決の糸口は、立場を超えた相互理解である。教師が寛大な心で、生徒の心情を汲み取ることである。「今何を悩んでいるのか」、「意欲を喪失している原因は何か」、「家庭環境に問題はないか」、「学校環境に問題はないか」・・・等に思いを巡らし、真摯に向き合うスタンスがあれば必ず生徒は心を開く。教師の厳しい中にも温かさが伝わる真剣な表情に、生徒は「認められている」、「心配してくれている」との思いが芽生え、信頼関係が育まれる源となる。あらゆる教育場面において、常に立場に相応した誠意ある対応が解決の全てである。

③いじめ

心の教育に全力を注ぐことだ。思いやりのある善き人とは、他人の痛みや悩みを我が事のように受け止め、何とか力になってあげようと行動する人だ。相手の立場になって行動出来る心豊かな人間になることを願って、徹底した内面指導を展開する。

・双方の人格を認めたアプローチ。

因果関係を冷静に分析してその原因を究明する。「何がそうさせたのか」「何が背景にあるのか」「決定的な要因とは何か」

・生きる力を育むための地道な継続指導、心の支えとなる温情を惜しまない

自律→自立・独立の意義を説き、根気強く見守る

・指導の過程で真剣に対峙して、生徒の琴線に触れる温かい対応

安心感の醸成により、解決方法の糸口が明らかになる

・いじめる側の生徒の心情も汲み取る

加害者意識の払拭に努めて原因究明に全力を注ぎ、共に歩む尊さの意義を理

解させる。お互いに心の傷を負っていることを念頭にして対応する。

④保護者召喚への対応

反社会的問題、非社会的問題を問わず、学校に向かう保護者の苦悩、困惑、心労は辛く厳しいものである。担当教員（管理職・担任教員等）は、その心情を先ず理解することだ。温かく接して、辛い心の重荷を解くことである。青年期特有の揺れる心の時期だけに、親子の対立は少なくない。親としての苦労を察し、問題行動の原因とこれからの改善策を共に考えていく姿勢を示す。従って、親子双方の立場を理解せしめる絶好の機会にすることだ。生徒には保護者の心情を諄々に説き、保護者には苦悩する生徒の側に立って弁護することである。面談を終えて学校を後にする時に、爽やかな気分となり「来て良かった」と感慨深げに帰宅してもらわなければ保護者召喚の意義はない。そして担当教師への信頼は、学校全体への信頼となる。

保護者への対応について、下記の心得が必要である。

- ・保護者と深く意見交換が出来る。保護者の心情を理解する寛大な姿勢
幅広い見識と知性を学ぶ研修に努める
- ・上目線ではなく、保護者・生徒の為に協調出来る器の大きさ
教師の立場を超えた人間関係の構築、高貴な人間性の体得を図る
- ・保護者に畏敬の念を抱かせるだけの教師
相互理解に努め、相互信頼を得る

6、特別指導（学校謹慎）の具体的指導例

①教育講和

- ・学習効果（レディネス）

学校謹慎はHRから離れる寂しさと孤独感が強い。従って、早く解除となりクラスに戻りたいと願う。この意識が「レディネス」につながる。即ち学習効果を生む心身の準備が成されているからだ。教師の熱意がそのまま伝わり、その指導効果は高い。意識改革を図るに絶好の機会となり、教育講話の意義がここにある。

- ・教育講和の具体的内容（例）

- ☆高校生の人格発達課題。自己同一性（アイデンティティの確立）
- ☆問題行動の要因とその究明
- ☆自己嫌悪、努力する厳しさと苦しさ、成長への条件
- ☆反省と自覚、夢・希望・願望へのステップ
- ☆人生哲学、日常の事柄に認められる教訓

②「・・・ながら教育」

- ・清掃活動の教育的意義（仏教説引用）

「自心清浄・・・自分の心が美しくなる」
「他心清浄・・・他の人も心が美しくなる」
「諸天歡喜す・・・この世の全てのものが生き生きとする」
「端正の業を植ゆ・・・すっきりと美しい行為の種子が蒔かれる」
「命終の後、正に天上に生ず・・・死後必ず天上に生を受ける」

掃除をしながら、取り留めない話の中に親近感が育まれる。共に作業する時間の中に共感が確立される。信頼関係の醸成、立場を超えた相互理解。時間（T）、場所（P）、状況（O）を超えた共感が育まれる。

・面談の場合は横に位置して対応すると、心が通い合う易い。雰囲気醸成する大切な要因となる。

③自己認識、自己実現を高めるグループ研修（意見交流）

個々の意見を問い、その回答は全て公開する。最終のまとめは指導教官が行う。必ず共通する要素があり、共に考える方向で意識の高揚を図ることが目的である。

（例）テーマ「感謝について」。

一人ひとりに、瞬時に思い浮かべたことを訊く。黒板（ホワイトボード）に氏名と提言内容を書く。更にもその真意を問うが絶対に否定はせず、必ず肯定して素直に受け止める。全員の回答を全て公表したら、共通する項目をまとめる。最後に教員自身の思いを述べ、生徒の回答と比較しつつ検証する。生徒自身は、他者の考え方と比較する過程において共に考え、その結果前向きに受け止める力が養われる。更に、自己洞察、他者との理解が高められる教育効果がある。その記録は反省ノートにしっかり記録して、以後の生活姿勢の改善、成長への足掛かりとする。自己洞察の効果が非常に認められる指導方法である。

7、教師と生徒は人生における運命的出会い

①生徒との出会い。偶然の出会いと必然の出会い

ホームルームにおける担任教師と生徒との出会いは偶然である。必然の出会いは、生涯に亘る「師弟関係」となる。極論であるが、生徒は教師を選択できない。故に、教師は生徒と必然の出会いにしなければならない責務があるのだ。正に偶然の出会いを縦糸とするならば、日常の教育実践を通して芽生えた信頼関係の横糸が必然の出会いに変える。教育の成果とは、将来に及ぶ師弟関係によって豊かな人生が可能となる。教師は関わる生徒全てに最善を尽くす意義がここにあり、必然の出会いにしなければならない所以である。

②「この高校に来て良かった」と述懐する生徒に。

この言葉で全ての苦勞が報われる。教師はこの言葉を求めて3年間努力する。長

い人生の中における3年間は、瞬き一つに過ぎないかもしれない。しかし、濃密な教育成果は月日に関係なく、極めて大きな力となる。悔いのない高校生活の中で生きる力が生まれ、限らない夢と希望が生ずるからである。そして母校に対する愛情は、そのまま教師との固い絆を象徴する宝となる。

終わりに

私学一筋の47年間であったが、特に高校教育に関わった40年の経験は実に濃密な内容であった。教科は「保健体育」、部活動は「卓球」。校務は最初から最後まで「生徒指導部」であった。県高等学校生徒指導研究会のメンバーとして務めたのは21年、生徒指導部長在任期間は実に13年に及んだ。地区高校生徒指導研究会も同様であり、他の校務部門と異なり情報交換に富む定期的な意義ある会議であった。特に公私立の関係ない忌憚のない意見が交わされ、研修の場として極めて学ぶことが多かった。

生徒指導部長として、学校秩序の確立と生徒個人の尊厳を守る狭間で悩むことに終始した日々であった。当時の苦悩・困惑を記す記録の数々は、膨大な資料として今も手許に残る。その中には、大事件となり世間を騒がせた問題も少なくない。しかし一線を退いた今思い起こすと全てが懐かしく、全力を尽くした当時の苦労が貴重な思い出に変わったことに気付く。激務故に辛かったこと、苦しかったことが寧ろ良き思い出となり、教師生活の宝にも思える程である。非行問題全盛時?の頃、全校生徒2,000名を超すマンモス校、学校謹慎で指導した生徒数は毎年500名を超えた。毎日のように特別指導に明け暮れた。生徒指導部長として、学校全体には「鬼」と称されたが、問題行動生徒に対してはその心の洞察に努め理解に努めた。その結果、指導を受けた生徒が逆に慕ってくれる不思議な人間関係を構築した。この関係は在校時代よりも卒業後により顕著となり、成長した彼等彼女らに囲まれる集いは教師冥利に尽きる至福の一時となる。そして、そこで又学ぶことが教師としての成長に結びつく貴重な研修になった。教え子に学ぶ意義を認識させられる時である。「生徒に学び、教師は成長する」、この持論の根拠がここにある。

平成26年に10年振りに校長として復帰したが、高校現場の変容に驚きを隠せなかった。非行問題は激減して、実に温厚で素直な生徒集団になっていたからである。しかし、高校生の問題は形を変えて潜んでいることも事実である。生徒指導部長時代には無かった新たな問題に直面したが、学校管理者となっても対応する指導理念に変わりはない。生徒理解に徹すること、保護者の心情を真摯に汲み取ること、温かく対応することに尽きるからだ。生徒には「認め」「励まし」「見守る」指導を心して、教師には常に「感謝の心」「反省する姿勢」「謙虚な言動」を唱えてきた。地道な努力は平凡であっても、その積み重ねは非凡な成果をもたらす。教師の生き甲斐、責務と使命がここにあると信じて疑わない。この拙作は、そのような思いをまとめたものである。